



Title	巻頭言：いま質的看護研究が求められているのはなぜか
Author(s)	鈴木, 敦子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 1998, 4(1), p. 1-1
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/56733">https://doi.org/10.18910/56733</a>
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 卷頭言

### いま質的看護研究が求められているのはなぜか Why qualitative research is necessary for nursing?

伝統的な科学の方法や枠組みが有効に機能しえなくなった現在、科学は大きな岐路にたたされている。科学的ケアと人間的ケアの2側面を必要とする看護は、当然ながらその影響を受け、看護実践や理論にも確実に変化が生じてきた。「よいケアを提供するためには、患者を総体としてとらえることが大切」との視点にたつ、ナイチングールを初めとするペブルウやオーランド、トラベルビー、ベイターソンら先人たちへの再評価の働きの一因は、そのことへの反映であろう。また、アメリカ合衆国看護界における1970年代後半からのレイニンガー、ワトソン、バースイらの目覚しい活躍や1980年を境に質的研究への関心の急激な高まりも同様であろう。アメリカ合衆国におけるこの傾向は、現在わが国においても次第にあらわれてきている。

看護研究の目的が、看護をよりよいものにするための科学的認識を目指して行われるとの見解に異存はない。またそのためには、量的研究が強調するように、「一定の問題をもち、作業仮説にもとづいて科学的に分析がなされなくてはならない」ことにも、何らの異論はない。だが現象を包含するよりも排除し、焦点を限定することをその範囲とする量的研究は、看護をよくするために何をなすべきかという、すぐれて実践的な回答を明確に与えていない。質的研究への関心の高まりの根源は、ここにあるように思う。つまり、量的研究は「看護を解釈するには役立っても、現実の看護を変革しうる性質のものであるか」と問えば、そこには疑問が残されているのだ。これは、現代科学や医療に問われている問題とまさに軌跡を一にしているものである。

奈良が指摘したように、「近代医療は、自然科学を基礎として形成されたために、医療の主体を医療技術者におき、医療の客体を疾病または病気におかされた臓器におくという構造で出発した……、このような自然科学的な医療は、人間の生命や疾病をモノとしてみるために、没人間的となりやすい」という問題は、看護に対しても重く問い合わせられている。つまり、人間的ケアを高く志向しながらも、看護は疾病モデルから抜けだせず、「人間」や「病い」そのものを問う視座をいまだ十分に持ち合わせていないことへの責任である。

では、「看護をよりよいものにするために」という命題は、どのような具体化のなかでこたえられるのであろうか。看護は、過去・現在・未来という異なる三つの時間を同時に生きている人間を対象にしている。だからその意義は、患者の「存在」、「生活」の脈絡において求められるべきものである。そして、その意義が意味あるものになるためには、看護の解釈から脱して、看護の変化が真に患者の「存在」と「発達」につながるものでなくてはならない。さらに、患者への働きかけがリアルにとらえられ、実践的課題に転移しうるものでなくてはならない。この意味において、質的研究の果たす役割は測りしれないものがあり、いまその研究が切に求められている所以がここにあると思う。

平成10年3月

大阪大学医学部保健学科  
鈴木 敦子